8/カンテレ

CSR Report 2015

関西テレビ 2014年度のCSR活動報告

Index

もくじ

6 はじめに 代表取締役社長 福井 澄郎

8 優良なコンテンツをつくり届け続けることこそが、私たちの使命です。

12 超えろ。カンテレ

CSR推進活動

18 各部を横断して活動を推進「心でつながるプロジェクト」

19 1 メディアリテラシー推進活動の取り組み

22 2 コミュニティー参画への取り組み

26 3 環境への取り組み

28 座談 祇園祭ごみゼロ大作戦を終えて

32 4 人権への取り組み

34 インタビュー テレビ局らしいCSR活動の誕生

38 5 映像表現を用いたCSR推進活動

40 対談 ワールドシフトをめざして

48 6 アナウンサーによる取り組み

49 7 次世代育成の取り組み

8 視聴者の皆さまとともに

9 内部統制システムおよびリスクマネジメント体制

編集方針

関西テレビでは2013年度から「CSR推進部」を発足させ、CSR推進活動に積極的に取り組んでいます。
このリポートではテレビ局としての最大のCSR活動である「コンテンツ」「放送」について紹介し、続いて国際規格ISO26000のガイドラインに沿いながら「戦略的CSR（攻めのCSR）」としてコミュニティーへの参画・環境・人権などへの取り組みを、また「基盤的CSR（守りのCSR）」として視聴者の皆さまへのご対応・ガバナンス・コンプライアンスの状況などを記しました。（※本文中の所属・肩書などは2014年度のものです。）

関西テレビ放送株式会社ＣＳＲ推進局ＣＳＲ推進部
530-8408 大阪市北区扇町2-1-7
Tel:06-6314-8094 Fax:06-6314-8189
E-mail:csr@ktv.co.jp

発行日：2015年6月30日

この冊子は100%再生紙を使用して制作しています。

Corporate Social Responsibility

企業の社会的責任

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感動にみちあふれています。

残念なことに、私たちの多くは大人になるまえに澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

子どもの未来は、さまざまな社会問題に大人がどう向き合うかにかかっています。

しかし、大人だけで問題に取り組むと、正しさを競うことに終始し、あるいは枝葉末節にこだわるあまり、ともすれば理屈が先行し、問題の本質を見失いがちになります。

私たちは、子ども心を常に忘れずに、子どもとともに社会課題に取り組んでいきます。

はじめに

テレビを取り巻く環境が急激に変化しています。

デジタル化が完成して以降、一気に押し寄せた新技術のトレンドに乗ってさまざまなデバイスが登場、そのためテレビの視聴形態は多様化の一途をたどっています。

さらには２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた４Ｋ・８Ｋやマルチメディアなど次世代放送の技術開発も、いま急ピッチで進んでいます。

止まることなく変化を続ける映像メディア。この時代のうねりの中でたゆまず、優良なコンテンツを送り続けることこそが、私たちの使命だと考えます。ライフラインとして信頼できる報道・情報、面白いドラマや楽しいバラエティー――誰よりもこれらを数多く作り、発信しているのはやはりテレビだからです。

コンテンツが視聴されるいわゆる「出口」は、先ほども申し上げた通りますます多種多様で幅広くなっていくに違いありません。

そのただ中で私たちは先頭を切り、培ってきた制作力・取材力・技術力を全力で発揮して、皆さまの信頼と期待にこたえるコンテンツを送り続けたいと思っています。

さて２０１５年３月30日、関西テレビは「超えろ。」という言葉をスローガンに、呼称を「カンテレ」に統一しました。

新しいロゴの上昇していく「８」のマークは動き出したカンテレの姿を、突き抜ける「カ」のラインは私たちの志である「超えろ。」を表しています。

カンテレはこれからの未来に向かって、これまでのカンテレをさらに超えて参ります。

このＣＳＲリポートは、よりよいコンテンツを皆さまにお届けする、というテレビ局としての根幹の使命を果たしながら、カンテレが社会への貢献・文化の振興を目標に取り組み続けているＣＳＲ活動についてまとめたものです。

カンテレのいま、そして未来を知っていただく一助としてご一読いただきましたら幸いです。

代表取締役社長
福井澄郎
Sumio Fukui

優良なコンテンツをつくり届け続けることこそが、私たちの使命です。

関西テレビは「テレビ放送事業」を行う会社です。
その根幹は映像(映像表現)を通じ視聴者に事実を伝えること、
そしてメッセージを伝えること。
言いかえれば私たちの映像を見てくださる視聴者の暮らしを
豊かにする番組を作り、送り出し続けること、
それが当社の事業のまさに
中心であり生命線と考えます。

ドラマ

火曜日22時の全国ネットドラマ枠では「ブラック・プレジデント」「ＧＴＯ」「素敵な選ＴＡＸＩ」そして「銭の戦争」といった話題作を制作しました。また、2014年度の文化庁芸術祭参加作品としてローカルドラマ「狩猟雪姫」を制作しました。猟師をめざす一人の女性の姿を通して、生きること、命と向き合うことの尊さを伝えるヒューマンドラマは高い評価をいただきました。

狩猟雪姫

バラエティー

平日午前の生情報番組「よ～いドン！」は11月4日の放送で占拠率53.0％をあげ、週平均占拠率103週連続30％以上を達成しました。「有吉弘行のダレトク!?」「村上マヨネーズのツッコませて頂きます！」「ちゃちゃ入れマンデー」も好調です。またピン芸人が競う「R-1ぐらんぷり」は通算13回目を迎えました。

ちゃちゃ入れマンデー

報道

より正確で、より詳しく、よりわかりやすい報道を実践しました。12月の総選挙特番では4時間の特別番組を制作したほか、安倍総理大臣、菅官房長官など主要閣僚がニュース番組「スーパーニュース アンカー」に生出演するなど、政治報道にも注力しました。また阪神・淡路大震災20年の節目を迎えた1月17日には計6時間にわたって5つの特別番組を放送し、今なお残る課題を社会に訴えかけました。

阪神・淡路大震災 特別番組

受賞作品
Award

	作品名	受賞	内容
1	ザ・ドキュメント 『みんなの学校』	第67回日本映画テレビ技術協会 映像技術賞（撮影 / ドキュメンタリー部門） 第51回ギャラクシー賞 テレビ部門 選奨 モンテカルロ・テレビ祭 ドキュメンタリー部門 入賞	「子どもたちが安心してのびのび過ごせる学校づくり」に取り組む職員や地域の人たち。小学校の一年間に密着し、今の教育を見つめたドキュメンタリー。
2	ザ・ドキュメント 『声なき声によりそって ～地域福祉の現場から～』	第22回坂田記念ジャーナリズム賞 特別賞	大阪府豊中市社会福祉協議会でコミュニティーソーシャルワーカーとして働く女性の活動を取材し、問題解決への取り組み過程を通して地域社会の新しい問題を掘り下げたドキュメンタリー。
3	ドキュメンタリー 『夢の途上 ～文楽・人間国宝の弟子たち～』	ニューヨークフェスティバル 芸術/ドキュメンタリー部門銅賞	文楽の人間国宝と、文楽の現状に悩みつつ師匠の芸を受け継ぎたいと願い修行を続ける弟子たちの真摯な姿に密着。
4	「スーパーニュースアンカー」 特集『ダウン症のピアニスト』	AIB国際メディアコンクール ショートドキュメンタリー部門優秀賞 ABU賞ニュース部門奨励賞	ダウン症で生まれつき右手首から先がない障害のある若者が、ピアニストとして多くの人の心を揺さぶる姿を日常の生活を交えて追った作品。
5	「スーパーニュースアンカー」 特集『二人の女性拳士 ～空手演武・日本一への挑戦～』	関西写真記者協会 テレビ・ニュース映画の部 協会賞	同門の二人の若き女性拳士が、日本一をかけて戦うまでを追いかけた映像企画。さまざまな撮影方法を駆使し、空手の演武を印象付けるとともに、二人の関係や心情を追った作品。
6	「スーパーニュースアンカー」 特集『花火2014夏 ～さようなら夏…名残の花火』	関西写真記者協会 テレビ・ニュース映画の部 撮影部門賞銀賞	報道映像部の撮影班のカメラマンがほぼ全員参加し、ナレーションを一切省き映像だけで作り上げた作品。
7	「スーパーニュースアンカー」 特集『76歳！現役の小学校校舎』	第67回日本映画テレビ技術協会 映像技術賞（撮影/ニュース部門）	親子三代に受け継がれる小学校への想いや暖かさを感じさせる映像にカメラマンの技術力が評価された。
8	バラエティ 『孫をたずねて三千里』	平成26年 日本民間放送連盟賞 テレビエンターテインメント番組部門 優秀賞	長い間孫に会えていないおじいちゃん、おばあちゃん。都会や海外で暮らす孫に会いたいけれど、さまざまな理由で会えない人をサポート、感動の再会のお手伝いする。
9	ドラマ 『Y・O・U やまびこ音楽同好会』	第33回日本照明家協会賞 テレビ部門大賞（文部科学大臣賞） 第67回日本映画テレビ技術協会 映像技術賞（音声技術）	売れないロック歌手が友人に頼まれ代理教師として京都府の田舎町にある高校に赴任。ワケアリ教師が悩みを抱えた生徒たちと音楽を通じて心を通わす青春ドラマ。
10	ドラマ 『神様のベレー帽 ～手塚治虫の ブラック・ジャック創作秘話～』	第67回日本映画テレビ技術協会 映像技術賞（編集技術）	漫画家・手塚治虫が名作「ブラック・ジャック」を産み出した昭和48年ごろを表現する80以上のCG映像、それらとマッチした当時と現代を行き来する演出、編集工夫が評価された。

	技術	受賞	内容
11	動きベクトルを応用した地震発生時の映像を自動切り出しする24時間地震収録システムの開発	平成26年 日本民間放送連盟賞 技術部門 最優秀賞 第67回日本映画テレビ技術協会 技術開発賞	24時間365日安定稼働し、地震発生時の映像を迅速に取り出せる仕組み。気象庁が発表する緊急地震速報をもとに揺れ始める時間を独自に算出し、その10秒前から揺れ検知処理を行いMXFファイルとして自動的に映像を生成、同時に送出サーバーに転送できるシステム。
12	可搬型非常用UHF帯伝送・放送装置とアンテナの開発	平成26年 日本民間放送連盟賞 技術部門 優秀賞	非常災害時に被災した中継局へ少人数で搬入設営し放送を継続するための装置。

スポーツ

「第34回大阪国際女子マラソン」では重友梨佐選手が日本人最高の3位に入る力走で世界選手権代表の座を獲得するなど、感動のレースを生放送しました。また、当社主催の「ダイヤモンドカップゴルフ」は「アジアパシフィックオープンゴルフチャンピオンシップダイヤモンドカップゴルフ」としてアジアナンバーワンを決める新しい枠組みでの開催となり、スリリングなラウンドの模様をお茶の間にお届けしました。

第34回大阪国際女子マラソン

事業

およそ35万人の来場者を迎えたシルク・ドゥ・ソレイユ「オーヴォ」、2日間で3万人を超える来場者となった「ナイトロ・サーカス ライブ」などの大型イベントは、エンターテインメントに強いＦＮＳ系列を強く印象づけました。展覧会事業では「光と影の芸術人　藤城清治世界展」を開催、7万3千人の観客を魅了し、同展のために制作された大作「日本一大阪人パノラマ」が感動を呼びました。

日本一大阪人パノラマ 2014年 ©Seiji Fujishiro/HoriPro

コンテンツビジネス

映画事業では「繕い裁つ人」が好評を博したほか、「幕末高校生」「舞妓はレディ」「日々ロック」「バンクーバーの朝日」などの作品に出資しました。ビデオグラムはＤＶＤ「誰も知らない髙橋大輔」が2万枚を超える大ヒットとなり、動画配信事業では4Ｋで制作した「新ＴＶ見仏記」を4Ｋ専門チャンネルに配信したほか、ドラマ等を北米や中国などに配信しました。
グッズ・イベント関連では、ドラマ「ＧＴＯ」の関連グッズ、「よ～いドン！」の百貨店催事なども人気を集めました。

「繕い裁つ人」（©2015池辺葵/講談社・「繕い裁つ人」製作委員会）

2015年3月30日、関西テレビは
「超えろ。」という言葉をスローガンに、
呼称を「カンテレ」に統一しました。
新しいロゴの上昇していく「8」のマークは
動き出したカンテレの姿を、
突き抜ける「力」のラインは
私たちの志である
「超えろ。」を表しています。

8カンテレ

超えろ。

どこからか諦めの　言葉が聞こえてきても
諦めたくないのなら　諦めずに進めばいい
先駆者になりたいなら　願い続ければいいんだ
上手くいかなかった時の　言い訳ばかり考えていないで
のぞき込む　鏡の中　疲れた顔が　映っているなら
それこそが　大正解なんだ　誰かの笑顔を　見てから笑えばいい

（超えろ）自分の限界を　（超えろ）昨日の努力を
（超えろ）誰かの予想を　超えろ　その力があると信じて
（超えろ）今あるどのアイディアも　（超えろ）目に見えない枠組みを
心が望む未来以外　君は欲しくはないはず

求めなければなにも　与えられなどしない
心が今一番求めるものはなにか問いかけろ
欲しいものは手柄なのか　報酬なのかそれとも
自分がまだ見ぬ沢山の　人達の笑顔なのか

のぞき込む　鏡の中　疲れた顔が　映っているとしても
にっと口角を　指で上げて　自分のことを　時には騙せばいい

（超えろ）自分の限界を　（超えろ）昨日の努力を
（超えろ）誰かの予想を　超えろ　その力があると信じて
（超えろ）今あるどのアイディアも　（超えろ）目に見えない枠組みを
心が望む未来以外　君は欲しくはないはず

七転び八起きの　8の文字を　横に倒して∞の可能性を見つけろ

（超えろ）自分の限界を　（超えろ）昨日の努力を
（超えろ）誰かの予想を　超えろ　その力があると信じて
（超えろ）今あるどのアイディアも　（超えろ）目に見えない枠組みを
誰かの為に頑張れる　自分が一番好きだと認めろ

関西テレビ社歌「超えろ。」（作詞・作曲 槇原敬之）
「ゆうがたLIVEワンダー」テーマ曲
「超えろ。カンテレ」キャンペーンソング

1. メディアリテラシー推進活動の取り組み

関西テレビのメディアリテラシー推進活動は本格的に取り組み始めて6年になります。
さまざまな社員が関わることで、自らの学びにもなっています。

映像制作支援「学びアイ」

今年度から本格的に始まった「学びアイ」は、各校の放送部に訪問し、
直接対話形式での指導を主体とする映像制作支援活動です。

完成時のイメージをスタッフ間で共有することの大切さについて質疑応答。（批評編）

ベテラン編集マンからのアドバイス。ドキュメンタリーは「1日」「1ヵ月」「1時間」で構成するべし！

2014年度実施校

- 兵庫県立御影高等学校 放送部
- 大阪夕陽丘学園高等学校 放送部
- 兵庫県立北須磨高等学校 放送委員会
  - ⇒ 技術指導編（撮影・編集・ナレーション）
  - ⇒ 企画批評編（作品）
- 箕面自由学園高等学校 放送部
  - ⇒ 技術指導編（撮影・照明・音声）
  - ⇒ 企画批評編（作品）

兵庫県立北須磨高等学校 放送委員会

映像制作支援「学びアイ」を体験した感想　～2014年12月19日 第2回 批評編を受講して～

自分たちが作った作品をプロの方に見ていただいて、講評していただける機会はあまりないので、今回は本当に貴重な経験でした。企画書はどのように書いたらよいのか、企画意図とねらいは違うということなど勉強になることがたくさんありました。インタビューは今まで断られることも多かったので、今回教えていただいたことを参考にして次は挑戦したいです。この「学びアイ」で学んだことをこれからの部活動に生かしていきたいです。

2年　福井 南実 さん

今回の講習会では番組作りの大切なことがわかりました。私たちが作った番組の講評もしていただいて、これからしていかなければいけないことがわかってよかったです。私たちの作品はドキュメントに必要なことが欠けていたのでもう一度見直してよりよくしていきたいです。インタビューのしかたや編集のしかたなど、今回教えていただいたことを実践してみようと思います。このような機会を与えてくださり本当にありがとうございました。

2年　松本 奈々 さん

私は現在、来年のNHK杯に向けてラジオドラマの制作を計画しています。その上で今回の「学びアイ」で勉強した、企画の方法などはドラマでも参考になると思うので、実際にやってみたいと思います。インタビューの方法については、かなり苦労していたので、現場のお話を聞くことができて良かったです。屈強なメンタルをつけていきたいと思います。笑顔、簡単そうで難しいです。寒い中、遠いのに、私たちのために北須磨高校までありがとうございました。

1年　菱谷 奈菜美 さん

夏に伺った時は、まだ制作をする前でしたので、番組制作とはどういうものか、まだ分かっていなかった時でした。今回は実際に一本番組を制作し、番組作りの難しさ、大変さを実感していましたので、自分達には何が足りないのか、どうしたらいいのか、教えて頂きたいことがたくさんあって、武藤さんのお話を聞かせて頂くのを楽しみにしていました。一つ一つ丁寧に質問にも答えて下さり、ありがとうございました。そして番組の企画段階で、企画意図、ターゲット、内容という3つの点を大切にするというお話は、焦点がはっきりと見えてきてとても分かりやすかったです。

教えて頂いた通り、早速来年の番組制作の企画書を生徒達が書いてきました。武藤さんが帰られた後は、生徒達の目が輝いていました。一つの番組を制作するにあたって、事前指導としての「学びアイ」、作品の講評までして頂き、その後の指導としての「学びアイ」、こんなに恵まれた時間を頂けることに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

顧問　須々木 容子 先生

各部を横断して活動を推進「心でつながるプロジェクト」

関西テレビではCSR活動の推進、
そして意思決定の場として社内横断プロジェクト
「心でつながるプロジェクト」会議を毎月開催しています。
会議は各セクションからの企画提案の集約、
そしてCSRマインドの浸透という両義を果たすもので、
関西テレビが持っているリソースを可能な限り視聴者の皆さまと共有し
更に豊かな社会の実現に寄与すべく、
話し合いが続けられています。

「心でつながるプロジェクト」会議

オープンスクール＠カンテーレ

2014年11月30日（日）
場所：カンテレ扇町スクエア1Fなんでもアリーナ、アトリウム

メディアリテラシー推進活動の一環として年に1回関西テレビ社屋で行う公開授業「オープンスクール@カンテーレ」。5回目の2014年は夏の台風の影響もあり、初めての秋の開催となりました。
「楽しく学ぼう！テレビのしくみ」をテーマに1時限目「宣伝部」、2時限目「報道部」、そして3時限目「制作部・制作技術部」の3時限でそれぞれ公開授業を開催。今回も小学生を対象にワークショップ形式で番組のできる仕組みや取材のいろはなどを学んでいただきました。
またアトリウム会場では廃棄ビデオテープを使ったアートワークショップなどを行ないました。

プロ顔負けの迫力！小学生たちの「ハチエモンボイス」に会場も盛り上がる

秀作ぞろいに講師の２人も楽しそう！

関西テレビ 編成局 宣伝部 専任部次長　長谷川 由紀

オープンスクール@カンテーレ2014を終えての感想　～オープンスクールの授業を担当して～

1時限目は宣伝部の授業として、子供たちに「ハチエモン アニメCM」のアフレコ体験をしてもらいました。可愛らしい声と自由な発想のアフレコによって、ハチエモンのイメージが十人十色にどんどん変化していき、宣伝担当者の私にはとても新鮮な驚きでした。
テレビ番組も同じ。このハチエモンCMのように、ひとつの映像に対して「どんなコメントを付けるか」、「どんな声で語るか」、「どんなBGMをつけるか」によって、同じ映像なのにイメージが様々に違ってくるものです。
ひとつの映像を見たときに「もし別の言葉で伝えられたとしたら、BGMが違っていたら、私たちに伝わる印象は変わるかもしれないな。もしかしたら真実はこれだけでなく、他にもあるかもしれない」などと想像してみる癖をつけることで、「メディアを読み解く力（メディアリテラシー）」を養うことにつながる気がします。
私個人としても、一緒に登壇した愛らしい子供たちが懐いてくれて、まるで二十四の瞳の大石先生になった気分で幸せなひとときでした。

出前授業（メディアリテラシー）

関西テレビの番組現場で働く社員が、放送エリア内の小学校を中心に中学・高校、支援学校などに訪問し、テレビの仕事や番組をつくるにあたり大切にしていることを子供たちに直接語りかけ、伝える側の立場を学んでもらいます。今年度は11校＋1団体で実施しました。

大阪市立扇町小学校での授業風景。テーマは「『快傑えみちゃんねる』を勉強して、人生を楽しめる人になろう！」。

コリア国際学園での授業風景。自身がつくったドキュメンタリーの制作ウラ話もありの楽しい授業でした！

2014年度実施校

- コリア国際学園 中・高等部
- 池田市立細河中学校 3年生
- 兵庫県立氷上特別支援学校高等部
- 豊郷町立日栄小学校 6年生
- 池田市立渋谷中学校 3年生
- 京都府立京都八幡高等学校・南キャンパス 3年生
- 大阪市立日吉小学校 5年生
- 大阪市立姫里小学校 5年生
- 大阪市立此花中学校 1年生
- 大阪市立扇町小学校 5年生
- 大阪市立苅田北小学校 4年生
- 日本ろうあ者卓球協会

大阪市立此花中学校での出前授業風景（キャリア教育編）。出演者を中心にどんどん広がる仕事のつながりをディレクターが分かりやすく解説。

関西テレビ 報道局 報道部 記者（大阪府警記者クラブ） 押川 真理

出前授業を終えての感想　～気づきはむしろ局員の側に?!～

（おばちゃん）「お姉さんマイク持ってるけどアナウンサー？テレビ出るん？それかあれ？カンペ書いて、5秒前～って叫ぶ人？」
（私）「いやいやいやいやちゃいますねん。私は記者でして―・・・」

取材中によくこんな場面に出くわします。視聴者には、“テレビ局の記者”が何をしているかイメージがないことを常々感じていました。そんなわけで、今回担当させて頂いた大阪市立日吉小学校の出前授業では、子どもたちに「記者のお仕事」を初めに知ってもらうことを意識して臨みました。
● 取材をして構成を考える→原稿を書く→（デスクの厳しいチェックを受ける）→編集→放送
短い授業時間だったので、簡単な仕事の流れを伝えるに留まりましたが、少しでも子どもたちに記者気分を味わってもらおうと、原稿の執筆に挑戦してもらいました。
あるニュースの同じシーンを見ながら書いたので、皆似たような作文になるかなぁ、小学生だし・・・と思っていましたが、なめていました・・・！見事にひとりひとりの文章が異なり、伝えたいことも柔軟で様々でした。日々自分が書いているニュース原稿においても、言葉選びの重要性を改めて感じた瞬間です。
今後子どもたちがニュースを見てくれたときに「あ、この原稿あのお姉さんが書いたのかな」なんて、私の顔がちらついてくれたら幸いです。

第5回 中崎町キャンドルナイト

2015年2月14日(土)
場所：大阪市北区中崎町一帯
主催：中崎町キャンドルナイト実行員会 後援：関西テレビほか

レトロ感あふれる町中で手づくりのキャンドルを灯し、環境意識を高め、地域の活性化を促進するハートウオーミングな催事「中崎町キャンドルナイト」に実行委員として参加しました。

2014天神天満阿波おどり

2014年8月24日(日)
場所：天神橋筋商店街、大阪天満宮
主催：天神橋筋商店連合会、北区役所ほか　後援：関西テレビほか

地元の天神橋筋商店街の活性化を目的に実施される催事を後援、「うちわ広告」に協賛しました。天神橋筋商店街を「連」ごとに流し踊りで踊ったあと、大阪天満宮の境内に全ての「連」が集合して踊る総踊りに、悪天候にも関わらず多くの方が集まりました。

2. コミュニティー参画への取り組み

地域催事の主催・後援などに加え、当事者の方々と共同してそれを構築していきながら顔の見える関係性、あいさつをかわす関係性を築くことに取り組みました。

公益目的催事への後援名義

年間70本ほどの公益目的催事の名義後援を行っています。チラシやポスターを社内および社屋パブリックスペースに掲出し、催事告知に協力しています。

第15回 天満音楽祭

2014年10月5日(日)
場所：大阪市北区一帯
主催：天満音楽祭実行員会　後援：関西テレビほか

「音づくり、町づくり、仲間づくり」をテーマに大阪市北区一帯で行われる国内有数の市民音楽祭に、実行委員として参加しました。2014年度は社屋内にある大画面ステージを会場の一つとして提供、前日祭も含め大いに盛り上がりました。

関西テレビ 防災シンポジウム
つたえるいのち つながるいのち
～阪神・淡路大震災20年～

2015年1月12日(月・祝)
場所：カンテレ扇町スクエア1Fなんでもアリーナ、アトリウム
主催：関西テレビ

阪神・淡路大震災から20年、あの過酷な体験から我々は何を学び、どう社会課題と向き合ってきたのか？「災害に負けない強い社会をつくるために」をテーマに、追悼コンサートとシンポジウムを実施しました。

第1部　つたえるいのち

20年前のあの日、21歳で夢半ばにして亡くなった大学生の加藤貴光さん。彼が生前、母りつ子さんへあてた感謝の手紙―「親愛なる母上様」。
母は息子への想いを語り継ぐことで、そしてその手紙に感動した音楽家の奥野利勝さんは曲をつくり、歌いつぐことで命の尊さを伝えました。

第2部　つながるいのち

震災以降ボランティア活動に関わり続けているメンバーでのシンポジウム。稲村和美尼崎市長、エッセイストの藤本統紀子さん、大阪ボランティア協会の早瀬昇さんなど多彩な登壇者による議論で、災害に負けない強い社会をつくるために何が必要なのかを検証しました。

第3部　ひろがるいのち

震災を機にうまれた新しいＮＰＯ活動として「イザ！カエルキャラバン！」と「シンサイミライノハナ」を例にあげ、それぞれの代表である永田宏和さんと西川亮さんが、地域における顔の見える関係性づくりの重要性を伝えました。

第22回 ワン・ワールド・フェスティバル

2015年2月7日(土)・8日(日)
場所：カンテレ扇町スクエア1Fなんでもアリーナ、アトリウム、扇町公園、北区民センター
主催：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会
後援：関西テレビほか

西日本最大の国際協力のお祭り「ワン・ワールド・フェスティバル」に実行委員として参加しました。2014年度から会場を変更し、関西テレビ社屋はじめ、隣接する扇町公園、北区民センターを会場に2日間で2万6千人の方が参加しました。これは関西テレビ社屋への来場新記録となり、国際協力だけでなく周辺地域の活性化にも大いに寄与する催しとなりました。

公益信託グリーンプログラム21 みどり基金

関西テレビと産経新聞社の提唱で大阪府の緑化促進を目的に1993年に設立された「公益信託グリーンプログラム21みどり基金」。2014年度はシカによる深刻な被害にさらされている能勢妙見山のブナの森を保全する活動などに助成しました。

総務部による活動

雨水濾過設備で雨水の中水利用を行い、社屋で使用する水の約10%をまかなっています。
省エネを促進するための屋上緑化では、さつまいも、ゴーヤ、キュウリ、かぼちゃ、ナスなどを栽培し、収穫した作物の一部を社内の食堂で利用しています。

3. 環境への取り組み

社内で取り組めるプロジェクトと外部プロジェクトの活性化の両面で、
関西テレビだからこそできる活動を展開しています。

祇園祭ごみゼロ大作戦

祇園祭宵山行事期間に発生するごみの量は約60トン。昨年度はそのごみを減量させるべく市民、行政、露天商、一般廃棄物事業者が一丸となり、世界初の試みとして夜店や屋台で使う食器21万食分をリユース食器に変えることで地球温暖化防止に取り組みました。
約2千人のボランティアスタッフの活躍もあり、1人当たりのゴミの量を40%減らすことができました。関西テレビは番組での紹介や、当日ボランティアに参加することで協力しました。

廃棄テープリサイクル &
アートリユースプロジェクト

年間1万本におよぶ廃棄ビデオテープをリサイクルしています。データ消磁後のテープは、金属は金属に、プラスチックはプラスチックに、テープ部分は固形燃料に生まれ変わります。その最初のステップである分解作業を障害者の方にご協力いただき、彼らの仕事として役立てていただいています。また、部品の一部を障害者のアート活動の素材として活用しています。

アート制作作戦会議

祇園祭ごみゼロ大作戦を終えて

@京都市役所 2015年5月22日

祇園祭ごみゼロ大作戦 実行委員会実行委員長 京都環境事業協同組合理事長 新川 耕市 氏

京都市長 門川 大作 氏

祇園祭ごみゼロ大作戦呼びかけ人 龍谷大学政策学部准教授 深尾 昌峰 氏

関西テレビ CSR推進局 CSR推進部 専任部長 森田 誠二

(森田) 本日は、「祇園祭ごみゼロ大作戦」という世界初の試みに取り組まれた方々を代表して3人の方にお話をおうかがいします。まずは行政の長として門川大作京都市長さま。そして、「祇園祭ごみゼロ大作戦」実行委員長の新川耕一さま、呼びかけ人の1人であり、多くの学生さんと共に活動した龍谷大学政策学部准教授深尾昌峰(まさたか)さまにお越しいただいております。

まず、今回のプロジェクト素晴らしかったですね。私も一時、中京区に住んでいたことがあるので、祇園祭は近しく感じます。祭りといえば、にぎわいをつくる屋台をまわるのも楽しみでしたし。ただ、終わってからの屋台から出るごみの多さには辟易していました。しかし、今回は祭りが終わった後、ごみがほとんどなかったのは驚きました。素晴らしい取り組みでしたね。

この取り組みが始まったきっかけについてまずは市長からお願いします。

(門川) 京都市民の祇園祭に対する熱意でしょうね。

祇園祭には1000年を超えて続いている京都に伝わる日本人の暮らしの美学、生き方の哲学があり、それがユネスコの無形文化遺産として登録されている。京都人は、常は質素な生活、始末を心がける生活。しかし、お祭りの時はおもいきり豪華に、神様にも人々にも喜んでいただくという先人が大事にしてきた生き方がある。

環境と自然と共生していく暮らし方。物を徹底して大事に、無駄なことをしない。こういう生き方の哲学が根本になっている。

宵山が終わったらごみが散乱している、この問題に以前からも多くの市民のグループが取り組んでいただいてきた。その結果、京都は日本の大都市でごみが最も少ないまちになってきた。

例えば、日本の政令指定都市では市民1人1日当たりのごみ量が平均600グラムといわれている。しかし、京都市では441グラム。また、この13年間で燃やすごみは82万トンから46万トンに、43%減っている。焼却費用も94億円から54億円に40億円の削減になった。

市民も頑張っていただいた。京都環境事業協同組合も頑張っていただいた。さまざまな取り組みがベースになり今回の「祇園祭ごみゼロ大作戦」につながった。2000人ものボランティアスタッフが活き活きと活動される姿には感動した。東京や北海道、海外からの参加者もおられましたな。

(新川) 協力いただいたボランティアの方には感謝の一言に尽きます。この取り組みを一回だけでなく継続してやっていくことで、日常のごみの分別・減量もさらに進むと思います。今回の問題点を洗い出し、次回は解消していきます。

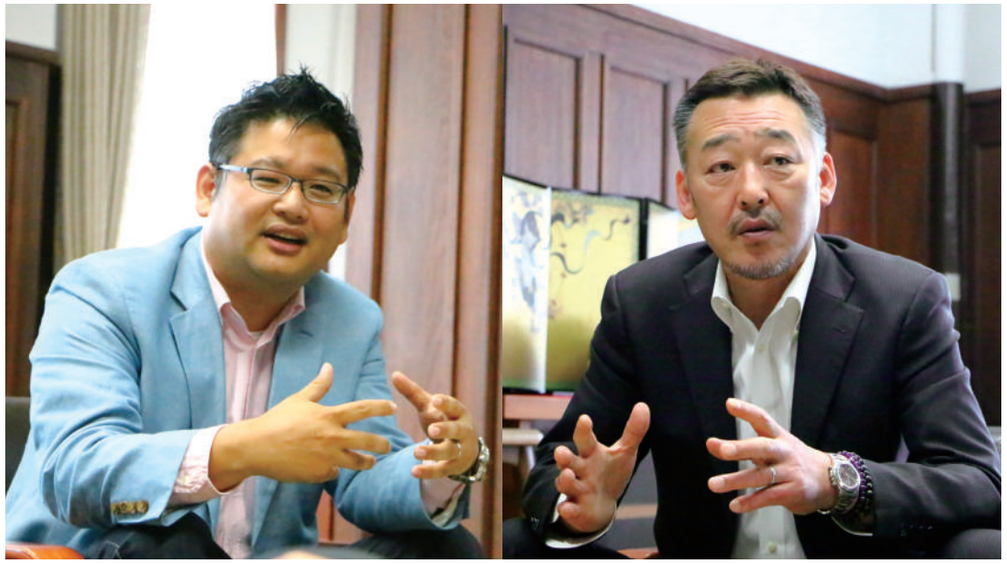
(門川) 89点ぐらいですか?

(新川) 僕の中では100点に近いです。短い期間で、あんなにもたくさんの方が一生懸命参加していただいて、車いすのかたもおられたし、本当にありがたいと思います。

(森田) わたしどもも、京都に拠点を置く企業のCSR担当者の集まりである「京都CSRネットワーク」の一員としてボランティア参加させていただきましたが、大学生のかたも積極的に参加されていましたね。深尾先生いかがですか?

(深尾) 私もフレームを作るところから参加させていただきましたが、学生たちも当日ボランティアだけでなく、まち中を1軒1軒歩いて協力をよびかけるなかで、まちの人たちも一緒にどんどん温度がたかまっていった。そんないいことやるのならうちも協力するとか、ポスターをここにはっていいよとか、まちの人に応援されながら、温かく迎えられて当日ボランティアが2000人になっていったのではと思います。作っていく手ごたえ感というか、自分もこの壮大なプロジェクトの一員なんだというか、祇園祭を支える新たな町衆。市民の人が祇園祭への新たな参加の方法として、みんながワクワクして参加されているのはまちにとってもいいことだと思います。

(森田) ローカルプライドを高めていく方法としても有効ですね。



（深尾） 新しい都市格を作る方法として、いい経験を僕ら市民もしていると思います。

（門川） 18年前、「世界一美しいまち・京都」のスローガンのもと「世界の京都・まちの美化市民総行動」をスタートさせ、市民・事業者・行政の協働で、京都で伝統的に行われていた門掃きの奨励やごみのポイ捨て防止、不法投棄、違法駐車、放置自転車、違反広告物などのまちの美観を損なうものの一掃に向けた取り組みを行ってきた。京都市では毎年国内外の観光客にアンケートをお願いし、どこがよかった？どこが悪かった？をお聞きして、よかったところは伸ばし、悪かったところは改善を積み上げてきた。

文化芸術、お寺、神社も素晴らしいが、この3年4年、まちが清潔で美しいという項目が一番になった。そして昨年度のトラベル・アンド・レジャー誌において、世界一の観光都市に選ばれるという栄誉を得た。市民ぐるみの運動の成果だと思う。それが今回の「祇園祭ごみゼロ大作戦」でさらに質的に高まった。露店商の人がリユース食器を使うというのも世界で初めてのことだと思う。前祭では、お客さんが24％増えて、ごみが25％減った。これはすごいことだ。

（森田） ちょうど、同時期に隅田川の花火大会でごみが散乱しているというニュースがありました。それと対比して、今回の成功には京都人のＤＮＡみたいなものがあるのでしょうか？

（門川） 京都に伝わる精神文化があります。しかし、それだけではだめ。それを活かす仕組みづくりが大事。心を活かすキッカケづくりがポイント。その仕組みづくりのため、実行委員が頑張った。仕事を超えた共感、共汗があった。この京都の取り組みが日本中に広がっていったらありがたい。

（森田） 京都が変われば、日本が変わり、日本が変われば世界が変わるわけですね。こういう取り組みをメディアとしてもっと取り上げていければと思います。

今年度もいよいよ始まりますが、昨年度の課題を踏まえて今年度の取り組みについて聞かせてください。

（門川） 常に前進していきます。昨年の反省会を兼ねた今年1月のシンポジウムで出た意見ですが、今年はごみ箱もリユースできるものを作る予定です。６００個ほど作ります。

（新川） 祇園祭に来る人にもっとこの取り組みのことを知ってもらいたい。

露店商の方にもさらに周知して、この取り組みが京都モデルとして全国の祭りに広がっていけば実行委員会として嬉しい。今年はさらに良いものにするためにみんなで汗をかく覚悟です。

（深尾） 古いものを守るというのは実はイノベーティブの連続だと思います。祇園祭もそうですがコアのところは大事にしながら、その時代に合った形に変えながらやらないと続かない。祇園祭が変われば世界中の祭りが変わり、文化のあり方が変わるという視点に立つと、もっと発信できることがある。そういう事ができるイノベーティブなまち。ベンチャースピリットあふれるまちとして京都をみんなが認識できる価値にしていけばいい。

何よりも企業の方々がそういうものを支えようという風土ができ始めてきていて、協賛金や寄付も大事だと思うが、それ以上に本業といかに結び付けられるか、応援という第三者感ではなくて、「祇園祭ごみゼロ大作戦」を一緒に作り上げるために自分たちのリソースやビジネスがどう結びつくのかという大きなプラットホームになっていけば、さらに大きくなるし、その価値が海外に影響を与える。京都が世界を変えていくというワクワク感がたくさんあるので、企業ＣＳＲというフレームに立って主体となって取り組まれることに期待します。

（門川） 今年3月に「京都市廃棄物の減量及び適正処理等に関する条例」を改正し、10月に施行するのだが、「しまつのこころ条例」という愛称をつけて京都市内はもとより全国に発信していくこととしている。

企業が、市民が、まち全体がなるべくごみを出さないライフスタイル・ビジネススタイルに転換を図っていく。食べ残しをしない。レジ袋の有料化を義務付けるとか、そもそもごみをつくらない、ごみになるものを買わない。こういう一歩踏み込んだ条例をつくって市民ぐるみで実践していきます。

（森田） その象徴的存在としての「祇園祭ごみゼロ大作戦」があるわけですね。これからの広がりがますます楽しみです。

本日はありがとうございました。

第62回 中学生人権作文コンテスト

大阪法務局・大阪府人権擁護委員連合会主催の催事で、次代を担う中学生に人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目標に行なわれています。関西テレビではコンテストで「関西テレビ賞」を授与、また授賞式のステージ構成に協力しています。2014年度は「車いすダンス」のステージをコーディネートしました。

第1回 ソーシャルパフォーマンス 手話寄席
～手は口ほどにものを言い～

2014年8月24日(日)
場所：カンテレ扇町スクエア1Fなんでもアリーナ
主催：関西テレビ、日本手話落語協会
協賛：積水ハウス、大阪ガスグループ"小さな灯"運動
後援：産経新聞厚生文化事業団、関西演芸協会

関西テレビらしいＣＳＲ推進活動の一つの柱として「ソーシャルパフォーマンス」という活動をスタートさせました。ソーシャルパフォーマンスとは、一般的には社会的利益実現のための活動を意味します。関西テレビでは様々な社会課題と向き合う事をテーマにした表現活動を「ソーシャルパフォーマンス」とよび、テレビ局の「伝える力」と「つなぐ力」で応援しています。

4. 人権への取り組み

世界の貧困児童を支援するFNSチャリティキャペーンは42年目、
増え続ける児童虐待に取り組むNPO・児童虐待防止協会への支援は25年間継続しています。
「持続可能な社会の発展」「人権と多様性の尊重」は関西テレビCSRの中核概念です。

世界の子どもたちの笑顔を応援

関西テレビはフジネットワークの一員として公益財団法人日本ユニセフ協会とともに1974年より「世界の子どもたちの笑顔のために」をテーマにチャリティキャンペーンを展開しています。2014年度の支援国は巨大台風に襲われたフィリピン。総額54,295,318円(関西テレビからは約400万円)を支援しました。2015年度はマダガスカル共和国の支援を始めています。

児童虐待防止協会への支援

関西テレビ報道局が1990年に児童虐待防止キャンペーンを始め、日本で初めて大阪で児童虐待防止協会が設立されました。協会の活動は、虐待で悩む母親や子どものSOSの「ホットライン」としての電話相談窓口、支援に当たる行政職員や施設関係者への学習会や啓発活動など多岐にわたります。関西テレビでは夕方のニュース番組内で「子どもの虐待ホットライン」のお知らせを毎日行うなど、支援を続けています。

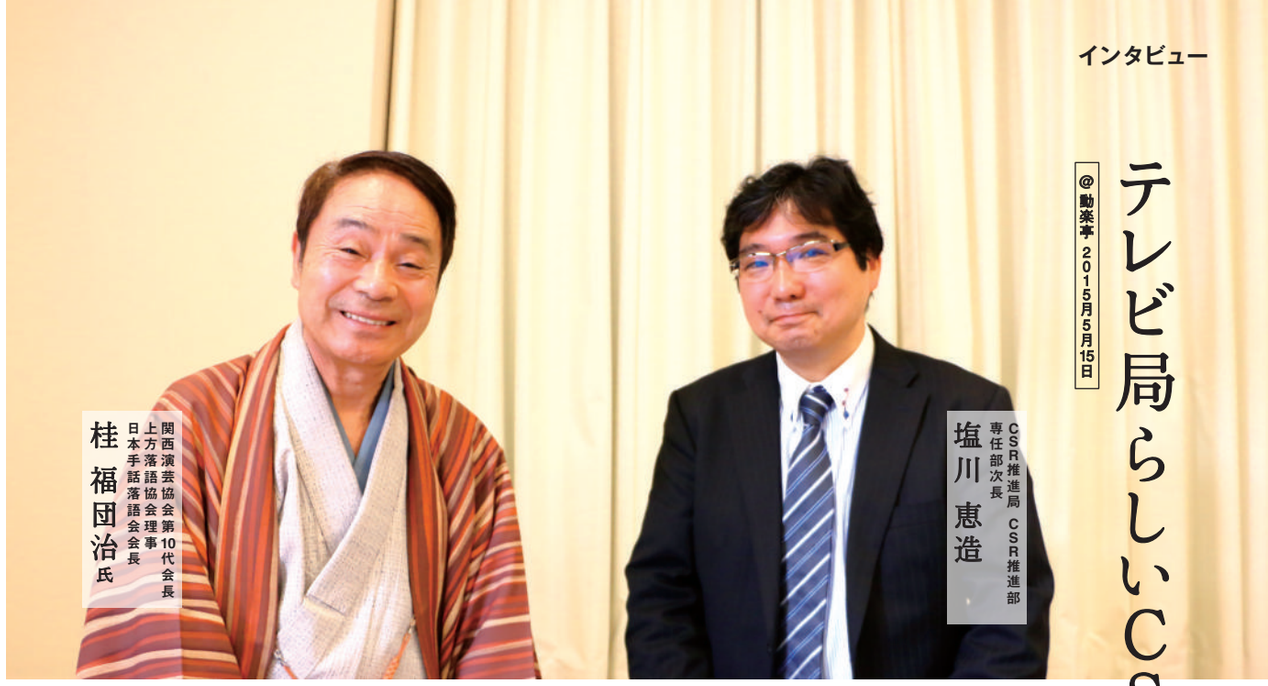
現在のCM

障害者の活動支援

毎年12月に梅田スカイビルで行われる「障害者週間協賛行事」に実行委員として参加しています。「障害者の社会参加を支援する企業展示会」では「廃棄テープリサイクル＆アートリユースプロジェクト」への協力アーティスト・河合晋平さんの作品を展示、廃棄テープアートのワークショップも行いました。

テレビ局らしいCSR活動の誕生

@動楽亭 2015月5月15日



CSR推進局 CSR推進部 専任部次長 塩川 恵造

関西演芸協会第10代会長 上方落語協会理事 日本手話落語会会長 桂 福団治 氏

第1回「ソーシャルパフォーマンス」手話寄席 ―手は口ほどにものを言い―

2014年8月24日、関西テレビ・なんでもアリーナで落語家・桂福団治さんとお弟子さんたちによる公演「手話寄席」が行われました。ハンディキャップの壁や社会課題と向き合う方々の表現を支援する関西テレビのCSR活動「ソーシャルパフォーマンス」の最初の取り組みです。

手話を使って落語を演じる「手話落語」――会場には聴覚障害者の方々を中心に約200人の観客が詰めかけました。

桂福団治さんは35年前に声帯ポリープを患ったさい手話と出会い、それがきっかけで「手話で演じる落語」を始めました。以来現在までに100人以上もの「手話落語家」たちを育てています。

手話落語の公演は高座の手話落語家のパフォーマンスに合わせてもうひとりの落語家が〝音声通訳〟をつける工夫がされていて、観客の誰もが「バリアフリー」で落語を楽しめます。

若き福団治さんの手話落語初舞台、お弟子さんたちに稽古をつける模様など関西テレビアーカイブの〝蔵出し映像〟もお楽しみいただき、続いては「大喜利」。舞台に上がった手話落語家さんたちは「手話は禁止、ジェスチャーだけで大喜利を演じる」という難しいルールです。

これに挑戦する落語家さんたちの生き生きした明るい表情に、客席の聴覚障害者の方々からは笑顔、拍手、さらに手話でOKサインや、高く上げた両手をキラキラ星のように振るエールが送られ、高座と客席は一体となっていきました。

気持ちを表現するしぐさが見る人にストレートに伝わる手話は「もうひとつの日本語、視覚言語なんです」――エンディングでは福団治さんのこんなメッセージが。続いて手話落語のテーマソング「シュワ・手話・和」を全員で合唱、楽しさ満点のお開きとなりました。

関西テレビではハンディキャップの壁や社会課題と向き合う方々の表現を支援するCSR活動「ソーシャルパフォーマンス」の取り組みを2014年度から始めました。

本社1階の公開スタジオ(なんでもアリーナ)をパフォーマーの皆さんに開放、イベント演出や広報活動などを通じてサポートしています。公演本番では各種の映像・音響効果も駆使し、観客が有料イベントとして納得できるレベルの舞台演出を目指しています。

(1)「手話落語」支援の経緯

四代目桂福団治さんは声帯ポリープを患ったことを契機に1979年、「手話落語」を編み出しました。

それから36年、100人以上の手話落語家を育成する一方で、自身は1999年に文化庁芸術祭優秀賞を受賞。この間、ライフワークとして聴覚障害者も健常者も楽しめる手話寄席を毎年夏に開催してきました。この定期寄席は関西の手話落語家たちの発表の場であり、手話落語を続け、広めていくための資金を得る機会でもありました。

ところが2014年、行政からの補助金がカットされ、長年続いた寄席が存続の危機に陥りました。そこで関西テレビでは文化芸術振興・障害者支援の観点から手話落語寄席を後援し、ともに演出することになったのです。

(2)具体的な支援でコラボ

本来かかるホール使用料を無償とし、チラシの作成やチケット販売も各方面に協力を要請。これにより、手話落語協会に自主財源が生まれました。関西テレビとしてもテレビ局らしいCSR活動として、ハンディキャップがあったり、社会課題に立ち向かうグループの表現活動をともに成功させる「ソーシャルパフォーマンス」が確立しました。具体的な演出として、関純子アナウンサーが総合司会を務め、関西テレビが所蔵する福団治さんの映像ライブラリーを大型スクリーンに上映するなど、舞台演出構成をサポートをしました。チケットは完売し、心温まる手話落語の舞台にスタジオ演出が加わることで観客の満足度も上がりました。

こうして「手話落語」からソーシャルパフォーマンスというコンセプトが生まれました。社会課題を表現するパフォーマーたちとカンテレCSRのコラボは今後も続きます。

桂 福団治さんと一問一答

Q　藤本義一さん原作の映画「鬼の詩」で主人公を演じたことは、その後の落語家人生に影響がありましたか？

A　昔は「けったいな人」が落語家になったように思います。芸は勘所を積み上げて味が出てくるもので、師匠のいいつけは絶対でした。私はそれを知る最後の芸人かもしれません。

　映画の主人公の桂馬喬は、最初は古典一途の生真面目な落語家でしたが、最愛の妻の死や天然痘がきっかけで無残なあばた顔になり、その顔を利用し煙管を吊るす芸で頂点を極めるが長くは続きませんでした。

　なぜ義一先生がこの映画の主人公に私を指名したのか？それを問いつづけながら、落語家としての自分を客観的に見つめて、主人公のあり方と自分を重ね合わせました。

　それからは落語家として、高座という「空間の画」の枠内で勝負することに徹するようになりました。

Q　手話落語が生まれた経緯を教えてください。

A　私が手話落語をはじめて、もう36年になります。噺家なのに過労から突然声が出なくなり、手術し、その闘病生活の中で思いつき、「手話落語」の初舞台の高座が用意されました。しかし落語は話芸。耳で聞いて、目で見て、イメージを描いてもらう。「全く音のない落語というものは邪道ではないのか」と葛藤がありました。ですが「今日目の前にいるお客様に、私の全てを注ぎ込んで見てもらおう」と腹を決め、一心不乱に演じました。すると、会場を埋めた耳の聞こえない人たちが、私の拙い手話落語を見ながら腹を抱えて笑っているではないですか。私は、安心すると同時に、自分自身の中が喜びで満たされていくのを感じました。その時、聴覚文化である落語に初めて接した、耳の聞こえない人の喜びが、私を包み込んでくれたのだと思っています。

Q　古典落語の重鎮から手話落語への批判の声もあった中、続けることのできたきっかけは？

A　それが怖くて「手話落語は一回だけに」と決めていました。ところが初舞台が終わり楽屋口を出ようとした時、「福団治さん」と呼びかける声がしました。10才くらいの男の子を連れたお母さんが立ったはりました。「どうかこの子と握手をしてやってください。この子は耳が聞こえません。毎年劇場にに連れてきているのですが、舞台が演芸に移っても笑ったことがありませんでした。それが今日、福団治さんの手話落語を見て、心の底から楽しそうに笑ったのです。私の袖を引っ張りながら、体全体で笑っていました。横にいて、こんなにうれしかったことはありません。よう手話落語というものを思いついてくれはりました。どうかこれからもがんばってください…。」

　あどけない少年の小さな手を握りながら、私も心で泣いていました。（礼を言わなあかんのは私の方です。拙い芸にも関わらず、こんなに喜んでくれはる人がいる。それなのに私はさいぜんまで自分の保身ばかり考えていました。情けないことです。おおきに、おおきに。）この日の出来事は、私に、手話落語の社会的役割の大きさを教えてくれました。いったん公にしてしまった以上、私個人の感情や事情でやめられるものではない。それを育て、より多くの人に共有してもらわなければならない。そういう決意が芽生えたのです。

Q　福団治さんが一番大事にしていることは？

A　手話落語で笑っているのは、聴覚障害者の人ばかりではありません。健聴者の人も笑っていることがしばしばあります。その瞬間、聴覚障害者と健聴者という壁は消滅しているのです。しかし、手話落語はまだまだ発展途上です。聴覚障害者と健聴者誰もが楽しめる、そして、日本だけでなく世界へと通じる、「手話落語という新しい芸能ジャンル」を確立することが、私をはじめ、手話落語を応援してくださる方々の最大の願いなのです。「私も覚えて語りかけてみたい」と刺激を受けてくださったら、頑張れるエネルギーとパワーになります。

Q　次代に向けたメッセージを

A　上方落語の噺家が、今は２００人を超えています。その中で、いかに時代に合った新しいものをやろうとも、先達たちの築き上げた血脈を忘れてはいけません。先達たちのおかげで、今もこうして落語を語れる。その人たちが顔をしかめるような落語家になってはいけません。あの世で喜んで、「わあー！」っと拍手してくれるような落語をすること。それがお返しやと思います。春団治師匠がやっている『代書屋』というネタも、もともとは米朝師匠のそのまた師匠である四代目米団治師匠が作られたものです。

　上方落語は伝統芸としてこれだけ長い歴史を持って、現代まで続いてきたものです。ですからこれはもう火が消えることはないでしょうし、次代の若い方々がしっかりと受け継いでいってくれることを僕は確信しています！

Q　テレビ局への要望は？

A　落語だけじゃなく上方演芸全体を盛り上る活動に理解をしていただき、また今回、関西テレビがＣＳＲ活動として手話落語を支援いただいたこと、感謝しています。できれば、放送でもうまく取り上げてほしい。関西演芸協会の会長を　10年以上やらせてもろうてるのは、落語だけでなく、上方独自の奇術や浪花節、講談、曲芸など、この上方で受け継がれてきた上方演芸を風化させることなく、次の世代に伝えていきたいからです。それが人生の使命、責任のように感じています。上方には落語の他にも色物、演芸がたくさんあります。メディアが次世代につながるようにその魅力をうまく発信できるかが問われています。

〈参考〉

四代目桂 福団治（１９４０年生まれ）

三重県四日市市出身。関西演芸協会第　10代会長、上方落語協会理事、日本手話落語会会長。藤本義一の小説を原作とした映画「鬼の詩」に主演後、声帯ポリープが発覚し、一時期声を失う。それを機に手話落語に取り組み始め、１９８１年に初披露。以後手話落語家１００人以上を育て今も意欲的に取り組んでいる。持ちネタは幅広く、特に「蜆売り」「藪入り」「ねずみ穴」などの人情噺を得意にしている。登場人物のけなげな姿、心のひだを紡ぎ出す語り口は、他の追随を許さない。

「人情噺の福団治」について

落語通の間では「人情噺の福団治」というキャッチコピーがすっかり浸透。福団治さんが演じる落語には、大阪商人の人間関係の中の絆や情愛があります。他人同士なのに、強くつながり、互いに支えあい、助け合う。落語らしい「からかい」や「いたずら」の演出にも、背景にある人間関係が表現されることによって、噺の持つ奥深さが感じられます。特に、親子関係・夫婦関係・家族の描写には「笑いながらも涙が流れる」というような不思議な情を感じる体験ができます。「ホロリとする噺」「ジーンとする噺」は「人情噺」などと分類されますが、福団治さんがじっくりと懐深く、なおかつ繊細に表現する「人情噺」は上方落語の中でも独自の輝きを放っています。

5. 映像表現を用いたCSR推進活動

ソーシャルシネマダイアログ@カンテーレ シリーズ

場所：カンテレ扇町スクエア1Fなんでもアリーナ
主催：関西テレビ放送　共催：公益財団法人信頼資本財団
企画協力：アミタホールディングス

社会課題をテーマにした優れたドキュメンタリー映画を鑑賞し、参加者全員で語り合うことで、
解決に向かう仲間づくり、場づくりに寄与するCSR活動を公益財団法人信頼資本財団と共に行いました。
コーディネーターに放送作家の谷崎テトラ氏を迎え、毎回さまざまなテーマのもと、
参加者と登壇者が一体となって熱いダイアログが交わされます。
2回目からは大学の研究者もゲストに加え、内容を充実させています。

(c)Vik Muniz Studio

第1回　6月15日（日）
テーマ：廃棄物とアート

上映作品　「**ヴィック・ムニーズ ごみアートの奇跡**」
（2010年 イギリス・ブラジル）

現代芸術家ヴィック・ムニーズが故郷ブラジルに戻り、世界最大のゴミ処理場で働く若者たちの人生をアートで変えていく。「芸術で世界を変える」感動のドキュメンタリー。

第2回　9月21日（日）
テーマ：平和

上映作品　「**ザ・デイ・アフター・ピース**」（2008年 イギリス）
ゲスト　**ヴァージル・ホーキンス**（大阪大学大学院国際公共政策研究科准教授）

1年で1日だけでもいいから、戦争や紛争などの暴力がふるわれない日を作りたいと願い、不屈の精神で奮闘する男の真実の物語。

(c)2011 Cinemaginaire/Big Picture Media

第3回　12月14日（日）
テーマ：人類と文明

上映作品　「**サバイビング・プログレスー進歩の罠**」（2011年 カナダ）
ゲスト　**宮野公樹氏**（京都大学学際融合教育研究推進センター准教授）

壮大なスケールと圧倒的な映像表現で人類の進歩史を描き、21世紀を生きる私たちに警鐘を鳴らす渾身のドキュメンタリー。

第4回　3月29日（日）
テーマ：エネルギー

上映作品　「**パワー・トゥ・ザ・ピープル～グローバルからローカルへ～**」
（2012年 オランダ）
ゲスト　**小川啓一氏**（神戸大学大学院国際協力研究科教授）

「100%クリーンエネルギー化」を実現したデンマークでの取り組みを紹介、再生可能エネルギーを導入することで地域でお金が循環し、人々が生き生きと暮らす様子を描いたドキュメンタリー。

ソーシャルシネマダイアログ@カンテーレ ワールドシフトをめざして

@京都大学宇治キャンパス 2015月4月6日

ソーシャルシネマダイアログ
@カンテーレコーディネーター
谷崎 テトラ 氏

ソーシャルシネマダイアログ
@カンテーレ 第3回ゲスト
京都大学 際融合教育研究
推進センター准教授
宮野 公樹 氏

(宮野) テトラさんとの話はいつも刺激的なので今日も楽しみです。

(テトラ) 私も楽しみです。さて、宮野先生がおやりなっている京都大学学際融合教育研究推進センターというのは？

(宮野) 人口爆発、環境破壊、資源枯渇など、地球が抱える問題は相互に関連しあい、きわめて複合的です。

大学は社会における知恵袋として諸問題解決のためにアイデアを求められる立場です。にもかかわらず、学問の現場では依然、多様化・細分化が進み「自分の専門分野以外はよくわからない」として、研究者は視野狭窄に陥りがちです。このような学問のあり方では複合的な問題に対処できないという危機意識を背景に平成22年に設立されたのが、このセンターです。現在、約900人が関わる全学的・分野横断的な33の異分野グループができています。

(テトラ) 今回、大学を飛び出てソーシャルシネマダイアログに参加いただいたわけですが、社会課題の解決のためには異分野でのコミュニケーションが必要ということで、まさにテレビ局の主催する一般のかたも参加するオープンなダイアログとなったわけです。これからはさまざまな立場のひとが、それを生かして未来を考えて行く必要がありますね。

(宮野) センターでは産学連携プロジェクトもやっています。

僕は相談にこられた企業の方に対して「製品じゃなくて、文明の話をしませんか？」っていいます。いや、正確にいうと、どうしてもそれを言うことになってしまうのです。経済が成長してモノがありあまる今、少しづつ脱物質に向かう流れが進んでいる。企業は何を売ったらいいのかわからない時代に突入している。そこで相談相手として選択肢に上がるのが大学です。であれば、やはり何が売れるかといった製品の話ではなく、社会はどういう方向にいこうとしているのか？といった文化、文明のような話になるのが自然なのです。

「この問題を解決する技術がほしい」といった、個別的技術課題に関する共同研究は産学連携本部を通じて実施されますが、個別の技術ではなく、次なる時代の価値を探し求めるような複合的、総合的、つまり学際的なテーマの場合には、われわれ学際融合教育研究推進センターの出番となる。

今回、テレビ局が次の時代の価値を求めているような気がしたので、おもしろそうなので参加したというわけです。

(テトラ) いかがでしたか？

(宮野) 本番の前に、あの映画を事前にカンテレの試写室で見ましたが、まあ、映像という手段はさすがにすごいなあと思いましたね(笑)。ずるい！って感じ。我々は文章で一生懸命に伝えようとしているけど、映像って一瞬で伝えられますね。文字を読んで想像力をもって理解するという手順をすっとばして、いきなりイメージで迫ってきますし、そりゃあ話が早いわ～って感じでした。

(テトラ) 映像によって問題提起する。メディアの役割ですね。

ソーシャルシネマダイアログでは、さらに参加者との「対話」によって深めて行くということをやってきました。

これまで「環境」「平和」「エネルギー」などのテーマで開催してきましたが、宮野先生には「文明」という大きな課題を扱っていただきました。

今、地球が22世紀まで持続するかどうかの課題の数は100以上あると言われています。大きくわけると「生態系の危機」「経済の危機」「社会の危機」の3つの危機があるわけです。しかもそれは複雑に結びついている。だから個別の解決策だけでは持続不可能で、「文明そのもの」の転換が必要だと言われています。

今回のダイアログでは「ワールドシフト」という形式のワークショップをさせていただき、参加者同士の未来ビジョンを共有しました。「ワールドシフト」とは2009年9月、世界的な金融・経済危機と環境問題に対応するために、システム哲学者アーヴィン・ラズロ博士やゴルバチョフ元大統領などの世界賢人会議「ブダペストクラブ」が、持続可能な社会への転換(ワールドシフト)の緊急提言を行ったことからはじまった、世界的なシフトのムーブメントです。

個人レベルの意識と行動の変化を根底として、国境や民族の壁を越えて、また政治やビジネスでのリーダーシップ、市民セクター、メディアなどあらゆるセクターが分断された関係を越えて、ともにワールドシフトの提言を行うことで、社会のシフトを促していくことを目標としています。

(宮野) テトラさんがやってこられた経験から僕の持つ問題意識についてぜひ聴きたいのですが、まずもって「持続性社会」という考え方はそもそも人間中心が前提でしょう。人類の文明が生き残るべきでないとは思っていませんが、自然の理(ことわり)はあると思う。つまり、人類文明は緩やかに下降に入っているんじゃないかなあと思うんです。

その悪化のスピードを遅らせるため抗うのはわかるが、未来永劫に人間が生き続けてほしいと願うというのは、たかだか100年程度の生命体が思う願いとして異様な気がします。我々よりはるかに長く繁栄した恐竜だって、「恐竜が永遠に生存しつづけるために！」など言ってなかったでしょう(笑)。

(テトラ) 人類10万年の歴史があるといわれていますが、地球環境に負荷をかけるような人間中心の文明はそのうち最近の100年ぐらい。昔はすべての人間が自然と調和のなかで生きていたわけです。

人間社会と自然の間には大きな川のようなものがあって、人間の側から川の向こうをみたり、川の向こうにわたって自然を観察して戻って分類したり、これまでの学問ってそういうことだと思うんです。

おそらくパラダイムシフトが必要だと思ったら、川の向こうに行って、森の側、自然の側から、もしくは生きとし生きるすべての生命の側から人類の文明をみてみるという視点が重要かもしれない。ここ数年、先住民の思想とか、日本でも伝統的な暮らしをしている人とかに注目が集まるようになったのは、100年、200年前の生き方に学びがあるということ。この学びが重要で、学問の体系としての近代教育とは違って、人間がよりよく生きるとは何かに対する気づき、つまり「センスオブワンダー」、環境学者のレイチェル・カーソンが1962年に「沈黙の春」で唱えた言葉です。

環境にいくら問題があると警告しても変わらない。そうではなくて自然の美しさ、すばらしさに目を開く瞬間を自分の中に取り込む。もしかしたら子どもの頃はそうだったように野山に行って一輪の花を見て感じるものがある。その気づきが「学び」なんです。

(宮野) かといって、僕らはクーラーのない時代には生きられない。

（テトラ） 逆にそこにイノベーションのヒントがある。クーラーがなくても涼しければいいですよね。

例えば電気を使わなくても涼しさを作るための知恵というのは日本の文化や技術の中にありますね。水を使わない洗濯機やお風呂、バッシブソーラーとか、使い捨てではなく繰り返し使うことで味わいが生まれる製品、かならずしも我慢を前提としない豊かな暮らしというものはあるはずです。

今までの経済学には限界がある、人口は２０３０年までに80億人に達すると言われています。いまでも世界中のひとが日本人と同じような生活をすると地球が２個半、必要になると言われています。ところが地球は１個しかないわけです。成長には限界があり、地球のキャパシティーも決まっているわけですから、効率的な分配と公平な配分の方法を議論する以前に、地球の持続可能性を前提としたエコロジー経済学が必要です。ヨルゲン・ランダースは「人類は１００億人も存在できない。適正な規模まで減らないと資源が足りなくなる」と言っている。

地球という船に我々が乗っている。この船はキャパの3倍の積載物を載せているというのが今の状況。今の地球は効率を最優先させることでバランスをとっている。でも三等船室には水が入り始めている。三等船室の人たちは声を出しても届かずに沈んでいく。さらに二等船室、一等船室にも水が入りつつあるのが現状です。二等船室にいるのは多分僕たち。一等船室への階段を争って昇ろうとしている。それが地域紛争です。でも沈まないんです。人類は絶滅しない。どんなに危機的な状況になったとしても何億かは生き残る。それは一等船室の人たち。一等船室の人たちは最後の最後までシャンパンパーティを続けているかもしれない。

一方で厳密に計算すると、ちゃんと分配すれば食料・水・エネルギーも１００億人分を賄えるだけ地球にはあるんですね。分け合えば余るけど、奪い合うと足りなくなる。本当は地球環境にもこれ以上負荷を与えない、もうひとつの人類の道があるんです。

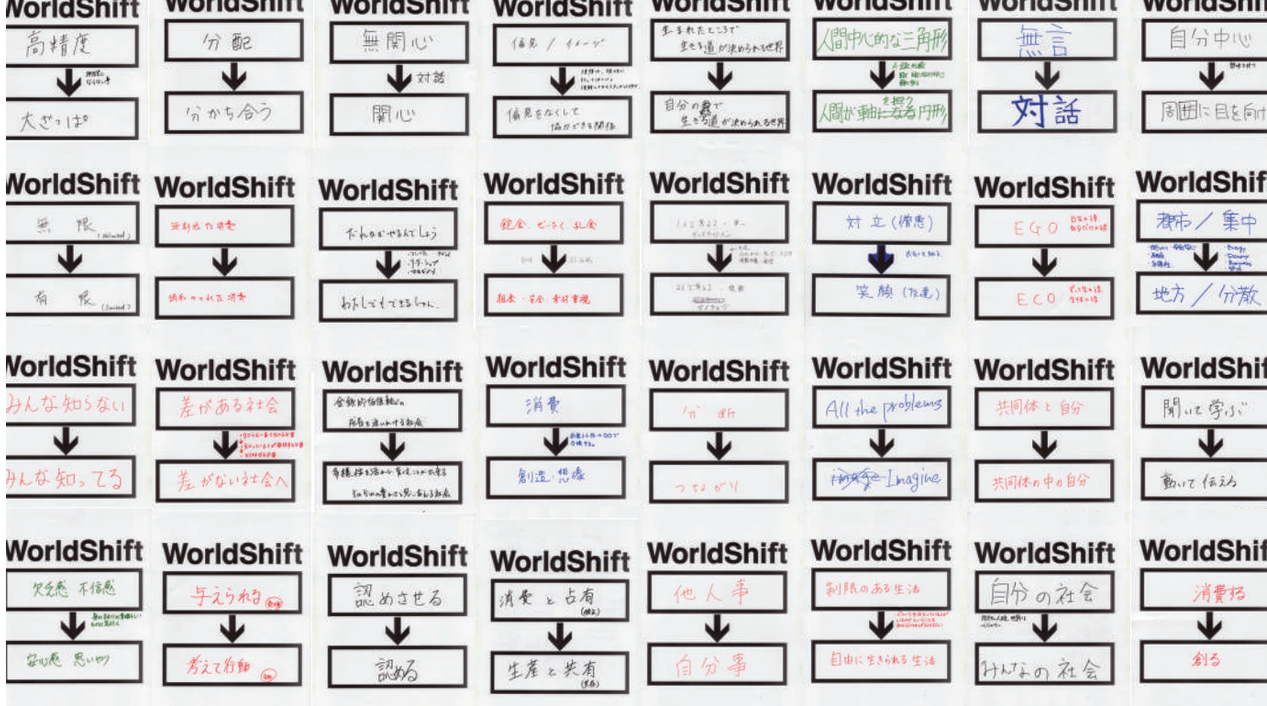
しかし、みな「誰かがやってくれるだろう」と考えているように見えます。でも政府や国連ですら２０５０年までのきちんとしたロードマップが描けているわけではないんです。ＮＧＯにおまかせでもダメで、やはり僕たち自身のライフスタイルを変えていく必要があるんです。

（宮野） わかる。この建物でクーラーをやめることはできない。ライフスタイルを変えるしかない。

そして、ライフスタイルとは日常のこと。日常の生活はなかなか変えられない。あまりにも基盤すぎて変えようがないと人々は考える。ほんと、現代文明は立派なものを作ったと思います。しかし、学問、むしろ科学というのもそうだが、体系がすごければすごいほど変わりにくいものなんですよね。

（テトラ） 今の生活を我慢するというのはたぶん無理だと思います。我慢するのではなく新しい快適さは発見できるはず。例えば水が少ないので、お風呂に入るのを3日に一度にするのは我慢できないが、少ない水の量でも泡を使って気持ちよく快適になる技術はある。自然と調和する省エネルギーの技術は必ずあるわけです。そこにいかにシフトしていくかを促すことが必要と感じています。

（宮野） 科学技術の生み出した問題を科学技術で解決する。それだけでなく、科学技術を扱う「人」というものについての学問が必要です。もちろんそれは人文学、社会学として確立されてますが、最近、その人文・社会学の縮小や廃止を文科省が口にだすようになって、ちょっとありえないことが起ころうとしています。ちょっと横道にそれましたが、言いたいのは今後ますます「人とは何か」の研究が必要であり、それをもってして我々の日常を問い直す作業がいるのですね。そうして基盤たる日常というものが変わらないとシフトはしないでしょう。いやひょっとすると、どうやって変えられるだろう、シフトさせられるだろうと考えること自体が無意味なのかもしれない。そのような能動的な問いは有意識下の世界で、本当に基盤たる日常が変わるには無意識の世界にアプローチするしかないと思う。意識しなくてもできることの積み重ねが日常というものなので、ゆえに、日常を変えるには無意識にアプローチするというわけです。わかりやすい例が伝統文化・風習・風土。これらは無意識の世界といえますね。我々はしらずしらずにそういうものに影響を受けていますから。他にも例えばアフリカに行ったら太陽にむかって手を挙げる部族がいるらしい。意味はわからないがやってしまう。身体化した意識のレベルで何とかしないと変わらないでしょうね。



（テトラ） その領域にアプローチしないといけないと思います。シフトというのはあらゆるレベルで起きていて、気づきのレベルに応じてアクションがある。それぞれのセクターやステークホルダーごとにちがった役割があるわけです。

最初に直感で変わろうとしている人たちがいる。損得勘定ではなく、確信もないが、そうしなければいけないと動き始める人たちがいる。いわゆるイノベーターですね。

例えばコロンブスもそうかもしれない。リスクと報酬が釣り合わないが前人未到の領域に行くという人たちが必ずいる。ビジョンを指し示す人です。

次に船団を組む人たちがいる。社会の仕組みに落とし込んだり、事業化していく人。僕のイメージだと2030年から40年がすごく重要。人口の曲線が極端に上がり、資源、食べ物、水不足の問題が急速に高まる。工業生産力も下がる。おそらく奪い合いが起こる可能性が非常に高い。その前にソーシャルデザインが必要なんです。

ワールドシフトは、その中で次の時代へのシフトのヒントを見つけていくきっかけをつくる活動だと思っています。

100の問題があれば100のソリューションがある。そしてそれぞれのプレーヤーが必要。例えば、ある技術者が画期的なエコ技術を思いついたとして、それを社会に普及されるための法整備が必要だとか、マネタイズの仕組みが必要だとか、それを伝えるためのメディアも必要。それを選ぶ消費者も重要。シフトのためには「目指すべき未来」を共有し、それぞれの役割を担って行くネットワークが必要です。最初は前例があるものでなく、リスクが高いものかもしれない。しかしビジョンを共有して、自分なりのミッションを見つけた人が自ら動くという領域は必ずある。この10年そういう時期だと思う。

（宮野） なるほど、テトラさんと話すと勉強になる。本当にありがたい。

コロンブスしかり、論理で動いたわけではなく、無意識の衝動によって動いて、その後に有意識下の人たちがついてくるというパターンで世の中は動いてきた。

（テトラ） 我々の脳について、あるいは意識について、われわれは本当のところまだよくわかっていない。宇宙のことも4%程度しかわかっていない。

見えない領域にいかにアプローチするかが今世紀の最も重要な学問になると思っています。実は「ワールドシフト」の提唱者のアーヴィン・ラズロ博士が、ワールドシフトの次の宣言として、これまで宗教とかが扱ってきた目に見えない領域と科学を結び付けていくことが本気で必要であることを示唆しています。

（宮野） 少し繰り返しになりますが、無意識の変化が必要だという視点に立てば、「ワールドシフト」が必要だと叫ぶことじたい方法としてまずいのではと思っていますがね。

（テトラ） 僕もシフトの言葉だけが先行してしまうのはよくないと感じます。

昔、モンティ・パイソンの映画にギリシアの哲学者とドイツの哲学者がサッカーをするというパロディーがありました。ギリシア側がソクラテス、プラトン、アリストテレスとか、ドイツ側がニーチェとかカントとか。試合開始のホイッスルが鳴っても、みんな考え込んで誰も蹴らない、議論ばかりしてボールが一向に動かない。その時アルキメデスが「Eureka（わかったぞ！）」と叫んで「得点する（笑）。あたりまえなんですが、いかに高邁な哲学があったとしても、競技場においては実際にボールを蹴らないと得点できない。

吉田松陰が「知行合一」という言葉で言ったように「考えることと行動することが一致しなければ意味がない」わけです。変化することについて、論を語るだけでなく、そのための行動が同時に必要。目指すべき未来のビジョンを共有することと同時に、実践していく必要があるわけです。

また宮野さんが指摘された無意識下の変化を、時間をかけて意識化させていくというプロセスも大切だと感じます。

（宮野） 僕がこの間出した本は『異分野融合、実践と思想のあいだ。』というタイトル。「思想と実践」ではなく、実践という言葉を最初にもってきたのは、実践が大事であることを伝えたかったのです。今の学問は日常の問題に充分に答えてないように思っています。これは決して実学の衰退を意味しているのではないです。いやむしろ実学が虚学の方を押しに押していることが問題なぐらいですから。つまり、学問が人の「生」を良くするということに真剣に向き合わなくなっているのじゃないかという指摘なんです。もっと

いうと「良くするとはどういうことか?」という問いです。「研究のための研究」という今日の研究を揶揄する言葉がありますが、あまりにもそれになってはいないかと。

そして、次に出した本は『研究を深める5つの問い』というタイトルです。実は、研究を深めるために必要な答えなんて何一つ書いていません(笑)。本来的な学者としての構えというものを現実の学術界制度の矛盾点をつきながらひたすら読み手に問いまくるというものです。

僕は若手研究者に学者として「こうしなさい」ということはできない。「学者として」という意味は、学者である以上、自分が信じることに誠実になるべきであり、その信じるものを押しつけるようなことは学者じゃないと思っているからです。もちろん、対話は押しつけとは違います。それは研鑽です。すなわち、若手研究者には「もっと励みなさい」としか言えないのです。

(テトラ) 学問とは「問いを学ぶ」こと。与えられた問いから答えを導き出すのではなく、この世界に対して、この社会に対して、あるいは自らの生き方を問いかける、その「問い」そのものを見つけると、おのずと自らの役割が見えてきて、シフトは加速する。

僕は2012年の国連地球サミット(RIO+20)の現地に行って、いまだ国際社会が未来へのロードマップを持っていないことを知りました。何の手もつくしていない。未来のガバナンスの合意もできていない。国際社会は未来をあきらめているんです。唯一の希望は「地球市民」とでもいうべき市民社会の動きです。そこに「意識の高い企業」や「倫理的な投資家」「技術者」や「科学者」、「行動できる市民」「公正なメディア」などが国境を越えてつながりはじめたということなんです。とてもクリエーティブな動きです。

おそらく2050年を人口100億人で持続可能な状態で迎えることができるとしたら人類は自らを破壊する戦いに勝利する。それがワールドシフトです。人類が起こしたこの状態に対して人類が知恵によって乗り越えることができる(ブレイクスルーのシナリオ)か、自らの行いで身を滅ぼすか(ブレイクダウンのシナリオ)か、それぞれの行動によって未来は変わると思うんです。

そして宮野さんがおっしゃるように、一番重要なのは目に見えない領域、無意識の領域にどう働きかけるかですね。社会のすべてが言語化されているわけではない。社会の変化は「集合的無意識」の領域において創造されると思います。

(宮野) 無意識へのアプローチとして、まず「言葉」への尊厳回復があると思います。昨今、言葉への軽視がひどい。言葉とは意識に先立ち、我々の価値を決めるもの。科学も言葉というものをあえて横に置いといた、つまり、対象としなかった。故に、科学はここまで劇的な発展をとげているわけですが、そもそも言葉、すなわち、価値や認識というものを無視してこの世の中で客観的、単独的に「在る」ことなど不可能。故に、価値は科学じゃないところがつけたわけですが、結果、科学は環境破壊にも環境保全にも使われるというまさにツールとして現代文明に機能してるんですよね。今更、科学は歴史や音楽とおなじ文化の一つといってもそれはもはや通用しないわけです。結局、今必要なのは、科学ではなくむしろ哲学。価値や言葉をあつかう学問としての哲学です。今、人類あげての哲学的治療が必要というわけです。

(テトラ) 仏教の八正道もまさに言葉を正すところから始まっていますね。

(宮野) そうですね。他には、ことわざ。これは、まさに日常の体得から得た法則のこと。ことわざの面白いのは全く反対のことに価値をおくものもあるってこと(笑)。いやあ、やはり奥深い。そもそも人生は奥深いんだから、白黒つけられなくて当然。

(テトラ) 最初に動く人たちは変化すること=「喜び」なのでいいのだが、変化できない人は、法律やペナルティー、リスク認識によってしか動けない。シフトにはグラデーションがある。最初にミッションで動く人たちがいて、次にそれを社会の中で組み立てていくデザイナーやプロデューサーがいて、そしてこっちの方が気持ちいいかなというロハスな人たちがいて、最後の最後はこの船沈むよという恐怖でしか動けない人たちがいる。

(宮野) おっしゃるとおり、大学にいても、ちょっと上から目線で恐縮ですが、気づいている人、気づいてない人がいて、悩ましいというか。ドライな意見ですがどうしても達しているか達していないかの区別はあるんですよね。これは決して自分が達してるとかではなく、発達の過程の話。あと実際、識字率というのは日本でも落ちているようだという話も聞きましたが。

(テトラ) 僕はそこでガンジーの側に立ちたい。識字率を持って人間の尊さとするのか?ここに老婆がいる。生まれたときから目が不自由。その代わり生まれたときから生かされていることがわかって感謝して生きている。一方で大学を出て町にゴミを捨てる人がいる。

一体、知恵とは何か?これはガンジーの問いかけ。

(宮野) そうですね。言いたくはないが、だんだん分かれてきていると思う。悟った人と、悟ってない人。繰り返しになるけど、これは区分じゃなく発達段階の話だと思っています。

(テトラ) だからこそ知恵ある人が重要になりますね。悟った人が悟りの向こうに行くのではなく、衆生のところにまさに菩薩行として留まるか。密教においても大日経と金剛頂教が、その一点においてわかれているというレベルの話ですよ。宮野さんの憂い、悩みは菩薩行ですよ。最後の最後までそこに留まって知恵を与えるがゆえの悩みだから。

桜沢如一というマクロビオティックの創始者の「永遠に先んずるものは常に最後であれ」という言葉があって、僕は若いころ聞いてまったく意味がわからなかったのですが、でもなんだかその言葉がジワーときた。「出口がわかって、ここにいけばこうなるとわかったがゆえに道案内はするが、同時に最後の1人が出るまで、この世界に留まる。」というのです。「この肉体なんていずれは消えてしまうと考えると、やれることは限られている」「自らの為せることを為す」というのですね。

さて地球的課題のお話、社会の変化に関して、ざっくばらんにお話させていただきましたが、その変化を促す「目に見えない領域」や「無意識の領域」に関しての宮野さんの視点、これは深い議論の入り口だと思います。企業のCSRリポートとしてはかなり突っ込んだ内容となっているかもしれませんが(笑)。しかし大切な視点と思います。

持続可能な文明の転換や幸福な社会をつくろうと考えたら、人間の持つ可能性や、現代において失われつつある人間らしさの回復が必要です。さらにいえば人間にかぎらず、生きとし生けるものは多様でありながら「生命」として一つにつながっています。文明の視座に、深い生命倫理が必要です。宮野さんのおっしゃる「哲学」もまさにそういうことなのかもしれません。人間の精神の限りない創造性を発揮し、経済、科学、医療、政治、教育、宗教、芸術、メディア等あらゆる分野に必要な変容をもたらすために尽力すること。そんな時代において、われわれがメディアを通じて社会に働きかけられることはたくさんあると思います。それは一人一人が内在する素晴らしさを顕現していくことでもあると思います。

本日はありがとうございました。

7. 次世代育成の取り組み

公益財団法人関西テレビ青少年育成事業団

昭和53年に開局20周年を記念して「野外活動を通じて健全な青少年を育成する」目的で設立した財団で、春・夏のキャンプを通じて自然の中で豊かな心とたくましい体を育む目的で運営しています。また子どもたちを指導する青少年リーダーの育成にも力を入れ、現在まで約800人のリーダーを輩出しました。

わくわくキャンプ参加者の
小学生と青少年リーダー

わくわくキャンプでの
キャンプファイヤー

若狭マリンキャンプでの手づくりイカダ

8. 視聴者の皆さまとともに

視聴者の皆さま方の貴重なご意見を賜り、番組に反映していくために「モニター制度」を設置し、日々放送される番組に対するご意見は「視聴者情報部」でお伺いしております。2014年度の総数が71,699件、問い合わせが29,788件、苦情が8,693件、要望や感想が23,448件、情報提供・その他が9,740件のご意見をいただきました。

これらは月2回放送の番組「カンテレ通信」で紹介しています。
また、テレビCMは繰り返し放送され、視聴者の皆さま方に大きな影響を与えます。その結果、皆さまに不利益を与えることがないよう、法令・法規やさまざまな自主規制を設け、内容・表現について厳しくチェックしています。

9. 内部統制システムおよびリスクマネジメント体制

2008年5月の取締役会で決議し改訂を行なっている「内部統制システム基本方針」に基づき内部の統制に取り組んでいます。この決議では、取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制、教育・研修、内部通報者保護のためのホットラインの設置、内部監査の設置などが盛り込まれています。
各部署にコンプライアンス責任者を設置するとともに、各現場には放送倫理担当者を配属し、「リスクマネジメント規定」に基づき、常勤役員からなる「コンプライアンス委員会」のもとで、放送に関わることは「放送倫理会議」で、リスク全般は「リスクマネジメント会議」で取り組んでいます。
また、「情報セキュリティー管理規定」「情報資産取扱要領」「文書管理規定」などにより情報セキュリティーの強化に努めています。

6. アナウンサーによる取り組み

関西テレビの顔であるアナウンサーたちも様々な活動を通じて貢献しています。

アナウンサー朗読会

年1回、普段のニュースや番組とは違うアナウンサーの一面を間近でに見ていただく朗読会を行っています。2011年には「明日への手紙」と題して東日本大震災の被災地への思いを込め、岩手県在住のミュージシャンをお招きし、ガレキの中から奇跡的に出てきた和太鼓と朗読のコラボレーションを行いました。

アナウンサー朗読会

キッズプラザでの絵本の読みがたり

絵本の読みがたり

関西テレビと同じビルにあるチルドレンミュージアム「キッズプラザ大阪」で定期的に絵本の読みがたりを行っています。子どもたちの創造力を育み、子どもと大人が同じ時間を楽しみ、つながりを生み出すお手伝いをしています。

関西テレビ前での街頭募金

東日本大震災被災者支援の街頭募金活動

震災直後の2011年4月から、関西テレビ本社屋前で街頭募金活動を行っています。
また「関西テレビ災害救援募金」キャンペーンスポットを放送するなど全社を挙げて支援活動を続けており、皆さまからお預かりした募金は現在、日本赤十字社を通じて義援金として役立てていただいています。

キッズプラザ大

関西テレビ放送株式会社